

# ブックデザインと文様蒐集

熊谷博人（高12回）

私の高校時代は、恥ずかしながら、80年近くの人生の中で一番自信をなくした時代でした。中学校ではそれなりの成績で自信があり、高校入学時はそんな気分のまま運動部の勧誘に心躍らせ、中学時代にやっていたバレーボール部に入部しました。当時のバレーボールは9人制でしたが、部員は12～13人だったと思います。すぐにレギュラー入りし、毎日、暗くなるまで練習をしました。

ハードな練習でくたくたになつて帰るという状態が続いたから、というわけではありませんが、2年生になると成績ががくんと落ちてしまつたのです。けれども、バレーはチームプレーなので勝手な行動もできず、いつのまにか勉強も、運動も自信をなくしてしまいました。

大学は好きな美術系に進もうと決めましたが、そんなわけで受験のためのデッサンなどの時間もあまり取れないと、3年生の後半から馬力をかけ、学校外で実技な

装丁を手がけたたくさんの本の前に立つ

どの勉強をして、なんとか、美大に入学できました。

美大は油絵科を専攻しました。友人や先輩に恵まれ、1年間に5、6回のグループ展や個展を行いました。指が固まって筆が握れなくなるぐらい、筆を持ち続けたこともあります。3メートルくらいの大作を描いたこともありました。3メートルくらいの大作を描いたことをしましたが、一番の収穫は、その後、一生の付き合いが続いた友人たちができたことでしょう。高校時代になくした自信も、徐々にとりもどし、美術の世界にどっぷりとのめり込んでいきました。

## ブックデザイナーとしてラッキーな船出

卒業後は、美術系の本も刊行していた出版社に入社し、ブックデザインの担当を任せられました。当時は、本の

装丁というものに少しずつ注目が集まってきた時代で、入社早々、充実した仕事に関わることができたことはラッキーでした。美術全集のレイアウトを担当したときには、私個人では絶対に会えないような評論家や画家の方々とも、ベテランの編集者について行けば対等に仕事ができたのです。

5年目になって、独立して仕事をすることに対し、確たる見通しもないのに、なぜか根拠のない自信が付き始め、辞表を出しました。会社には申し訳なかつたし、若気の至りで、今思うとゾッとした。会社からは、ようやくそれなりに仕事ができる段階まで育てたものを、とう思いからか、引き止められました。妻にもあまり相談もせざ会社をやめてしまつたのです。

やめると決めた頃、ある新聞社から、「アポロ11号が月に着陸するが、写真集を出したい、ただし失敗したら本の刊行は取りやめ、という仕事があるが、それでも受けれるか」という打診がありました。渡りに船とばかり、その仕事をやらせていただくことにしました。毎日、NASAから送られてくる写真を、その日のうちにレイアウトを済ませるという仕事で、最後のカットは月着陸の部分をテレビ映像のまま使い、月着陸から最短時間で豪華な写真集ができました。私の独立第一作はこのよう

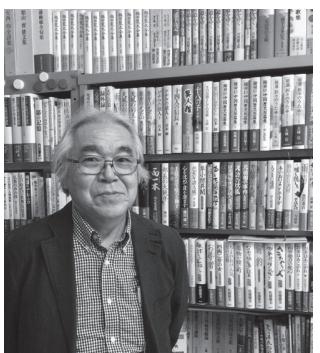
に、全くありがたいことから完成したのです。この幸運のおかげか、知り合いの編集者から、週刊誌の臨時増刊号などの仕事を次々といただけました。今では考えられませんが、徹夜で印刷所に詰めることも日常的でした。

## 大型全集や単行本の面白さ

30歳頃からは10巻、20巻という全集に関わる仕事が増えていき、文芸書の装丁を手がけることも多くなってきました。名の知られた作家やカメラマンとの仕事ができたのは、ブックデザイナーならではの喜びでした。池波正太郎、水上勉、司馬遼太郎、大岡信、渡辺淳一、芦澤鉢介、柳莫山、田沼武能、白旗史朗などなど、流石に大物の作家やカメラマンは、年令に関係なく、本づくりでは私も同じ立場ということで、こちらの仕事をきちんと受け止めていただき、とてもデザインがやりやすかったです。ただし、中堅の作家ほど理屈の合わない注文が多く、苦労することが多いのでした。

東山魁夷さんの作品集では、表紙の布を先生の好みの色に染め、色の箔押しをしました。有名な唐招提寺の襖絵を入れた画集では、膨大な下絵から完成までの工程を

●くまがい・ひろと  
阿智村出身。多摩美術大学油絵科卒業。出版社勤務の後、ブックデザイン専門の熊谷事務所設立。司馬遼太郎著『街道をゆく』(全43巻)『正倉院宝物』など、8千冊余の装丁、レイアウトを行つ。著書に『江戸文様こよみ』他。



克明に掲載しましたが、何度も市川のご自宅まで伺いました。優しい先生はほとんど、こちらでデザインした方向で了解をしてくださいました。ヒマラヤの写真で有名な山善の山本さんも、今、つらい日々を送っています。

な白旗史朗さんは50年近いお付き合いもあり、3冊以上の写真集やエッセイ集の装丁やレイアウトをしました。写真集を仕上げるには相当なエネルギーが必要でし

た。何年もの苦労を重ねて撮影された膨大な写真の中から、テーマに合った写真を選ぶところから始まります。

まずは、本に使用できるかな写真を予定の倍近く選びます。そこから、更に厳しく、全体の流れを考えながら、ポイントになる写真を選び、必要な枚数になるまで絞り込みます。常に全体を考えるために、写真選びは1ペー

ジ目から最後までを、繰り返し、繰り返し行います。白旗さんは間を置かず、一気に決めるというスタイルなので

で、当然1日では終わらず、2日間にわたることは普通です。徹夜も何度も経験しました。写真選びは印刷、製本など造本上のことでも考慮に入れなくてはできません。印刷時には印刷工場に出向き、全てをチェックしました。バブルの時代には豪華本が頻繁に出され、今になつて思えば贅沢な本づくりをしたと思います。造本的に可能のこと、例えば特殊な紙や布を使つたり、本文の文字の色をセビア色にしたり、何でもできた時代でした。その

骨董市で蒐集した染め物の型紙には、江戸時代のものや、弥生時代以前からあり、正倉院宝物には豪華な文様が残っています。衣類でいえば、絹織物には大きく豪華な文様が施されています。しかし、ほとんどが権力者がその力を誇示するためのもので、一般の人の着物は無地か単純な文様でした。

多くの人たちに親しまれ、大変魅力的なものでした。一つの「衣文化」を生み出しました。このように文様を通しても江戸時代の庶民の豊かさ、心の豊かさを感じることができます。この「三つ童」の「三つ童」は、『三



歌舞伎役者の着物にも憧れ、江戸時代の半ばから文様の種類が一気に増えました。ユーモアに溢れるものや、機知に富んだ文様も生まれています。需要が多くなれば、それに比例して文様の種類も増え、型彫師や染め職人の技術が向上します。江戸時代の庶民が作り出した文様は大きな「文様文化」ともいえます。こんな内容をまとめたのが『江戸文様 こよみ』（朝日新聞出版）です。



和更紗の魅力に取りつかれて

趣味と仕事を兼ねて集めた「和更紗」の本『和更紗江戸デザイン帳』(クレオ)も刊行できました。

更紗とは、インドを起源とするカラフルな染め物です。木綿地に植物や鳥獣、人物などの柄を使い、ひとつつの理

想郷を表現しています。和更紗は、江戸時代の中頃から江戸末期にかけて、外国との交易のなかで、急速に普及しました。「奢侈禁止令」のなか、絹織物を着ることができない庶民にとって、木綿に多色染めされた和更紗は

骨董好きの趣味が高じて

ここからは拙著について書かせていただきます。

後、現在までブックデザインの仕事を続けています。